

修士論文（要旨）

2012年1月

小学生の遊びの能力と言語的主張性が対処行動に与える影響

指導 幸田 るみ子 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
210J4008
橋村 茜

目 次

1. 問題	1
2. 目的	1
3. 対象と方法	1
1) 対象	1
2) 調査時期	1
3) 手続き	1
4) 調査項目	1
5) 分析方法	1
4. 質問紙の結果	1
5. バウムテスト描画法の分析結果	2
6. 考察	2

引用文献

1. 問題

先行研究で、遊びの経験が少ない子どもは、耐性不足やストレスに対するコーピングの不適切さが現れ、すぐ怒りを表出しがちであると言われている（遠藤ら、2007）。しかし、怒りといった攻撃性はマイナス面だけではなく、大竹ら（2002）の行った小学生の攻撃性の研究で、主張性に関連する特性（言語的攻撃）は、ストレスにおいて比較的良い効果をもたらす可能性が高いコーピングと関係があるとされている。

以上のことから、遊びの能力が高く言語的な主張性も高い子どもは対処行動のレベルが高い。遊びの能力が低く言語的な主張性が低い子どもは対処行動のレベルが低い、ということが仮定される。では、この遊びの能力と言語的な主張性の間が解離している子どもの対処行動は一体どうなっているのか。これについて検討された調査・研究が極めて少ない。よって本研究ではこれについて検討する。

2. 目的

本研究では、遊びの能力が高く言語的な主張性も高い子どもは対処行動のレベルが高い。遊びの能力が低く言語的な主張性が低い子どもは対処行動のレベルが低い、ということについて検討を行った。その上で、遊びの能力と言語的な主張性の間が解離している子どもの対処行動について検討することを目的とした。

- 仮説 ①遊びの能力が高く、言語的な主張性が高い子どもは、対処行動のレベルが高い。
②遊びの能力が低く、言語的な主張性が高い子どもは、対象行動のレベルが低い。
③遊びの能力が高く、言語的な主張性が低い子どもは、対処行動のレベルが高い。

3. 対象と方法

1) 対象

公立 A 小学校に通う 4 年生から 6 年生の 246 名。

2) 調査時期

2010 年 9 月～2011 年 7 月

3) 手続き

公立 A 小学校 4 年生から 6 年生に無記名式質問紙法とバウムテスト描画法を集団で施行。

4) 調査項目

子どもの遊びを測る尺度として集団遊び能力尺度 6 項目（今泉・宮崎、2009）。対処行動を測る尺度として社会的スキル尺度の中の積極的・主張的関わりスキル尺度 7 項目（今泉・宮崎、2009）。言語的主張性を測る尺度として、言語的攻撃尺度 5 項目（大竹ら、2002）。これら 18 項目に加え、MMPI 冊子式 B 型質問紙の L 尺度から 3 項目を採用した計 21 項目を、4 件法で評定した。

以上の質問紙に加えてバウムテスト描画法を使用した。個人について肯定的で有益な情報が得られ、樹木部分に反映されないものを投影される（中園、1996）ことから、根を描くように教示を行った。

5) 分析方法

分析は IBM SPSS Statistics 19 を用いた。

4. 質問紙の結果

分析対象は、未記入や誤記入を除いた 186 名（男児 95 名、女児 91 名：分析可能な回収率 76%）。主因子法・Promax 回転による因子分析を行った結果、3 因子構造を採用した。第 1 因子を「言語的主張性」、第 2 因子を「遊び能力」因子、第 3 因子を「対処行動」因子と命名した。3 つの尺度は互いに有意な正の相関を示した。次に遊び能力高低と言語的主張性高低のクロス集計を行い、さらに仮説を検証するために、クロス集計結果の 4 群間における分散分析を行った。そして群間の比較を行うために多重比較（Tukey HSD 法）を行った。結果、先行研究と同様に言語高遊高群は対処行動が高く、言語低遊低群は対処行動が低いという結果となった。また、言語高遊低群よりも言語低遊高群の方が対処行動が有意に高いという結果となった(Table1)。

Table 1 4 群間における多重比較（Tukey HSD 法）の結果

		平均値の差 (I-J)	有意確率
言語低遊高	言語低遊低	1.95513**	.000
	言語高遊低	.38333	.847
言語高遊高	言語低遊低	2.73846**	.000
	言語低遊高	.78333	.207
	言語高遊低	1.16667**	.009
言語高遊低	言語低遊低	1.57179**	.001

** $P < .01$

以上の結果から、仮説①、仮説②、仮説③共に支持された。

さらに学年間、男女間で対処行動に差があるか検討を行った結果、男女間で有意な差があり、女子の方が男子に比べて有意に対処行動が高かった($t = -4.243$, $p < .001$)。

5. バウムテスト描画法の分析結果

バウムテスト描画法は、杉浦（2002）のバウム分析表を用いて評価し、その出現率や傾向を各群毎に分析した。群間で差がみられたのは群内で 50%以上であった「II. 幹 5. ふくらみ・平行 平行」の項目のみで、その出現率は、言語高*遊高群 < 言語高*遊低群 < 言語低*遊低群 < 言語低*遊高群であり、群間に有意な差があることが分かった($\chi^2 = 7.31$, $p < .1$)。

幹の上端開放、実・葉の少なさ、幹の平行、幹の線等の特徴を踏まえた上で、4 群から代表的なバウムを選別し、質問紙の結果と合わせた上で検討を行った。

6. 考察

質問紙では年齢の発達と共に対処行動も発達していくとは言い切れないという結果が出ており、バウムテストでも同様の結果であった。また、バウムテストからは、本研究の対象者においては、年齢よりも幼い傾向が示唆された。対処行動の発達は必ずしも年齢の発達と比例しているわけではないが、感情の細分化といった情緒面の発達は年齢に比例して高くなると言えるだろう。

引用文献

- 遠藤俊郎・星山謙治・安田貢・斉藤由美 2007 遊びが児童の心身に与える影響について—児童の攻撃性・社会性に着目して— 山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 第12巻、25-34.
- 今泉和子・宮崎圭子 2009 ひとり遊びにおける子どもへのポジティブな影響—テレビゲームをタイプ別に見て— 跡見学園女子大学文学部紀要 第42号(1)、A75-A91.
- 中園正身 1996 一変法としての樹木画法の研究 根を強調した教示法の導入について 心理臨床学研究 第14巻(2)、197-206.
- 大竹恵子・島井哲志・曾我祥子 2002 小学生におけるコーピングと攻撃性との関係 学校保健研究 第44巻(2)、155-165.
- 杉浦守邦 2002 ヘルス・カウンセリングの進め方 3 東山書房、26-53.